

賢治と啄木 ―青春と東京―

米田利昭

はじめに

石川啄木明治十九年（一八八六）二月（一説には十八年十月）生まれ、四十五年（一九一二）四月死、二十六歳。宮沢賢治明治二十九年（一八九六）八月生まれ、昭和八年（一九三三）九月死、三十七歳。だから二人ともその生涯のすべてが青春であったとも言える。だが厳密には、最大限に見積って、それぞれの思春期から、死病にとりつかれる死の前の一、二年までを、青春ということが出来よう。そして彼らの青春においては、東京が大きな意味と吸引力を持っていたと思われる。

しかし、青春という以上、いかにも若々しく無軌道に、天馬空を行くときものでなければならぬと思うのだ。だからこの二人のそれぞれの最初の上京こそ、その青春の象徴であったと思われる、そこに二人の生活の仕方や考え方の違いも見てとれる。無論彼らには十年という年齢の差があるので、背景となった時代の違いも考慮に入れなければならぬ。そして彼らが第二回以後の上京でどう変化したかも見たいと思う。

一 啄木の東京は「都府の精神」探しに始まった

啄木にとって東京とは、自己の文学的野心を実現する場所であった。それは東京でなければならなかった。彼が東京へ初めて行ったのは明治三十五年（一九〇二）十月、雑誌『明星』に短歌一首が載ったのを機に中学を五年生中途で退学し、東京で新しき文学・芸術の人となるべく上京した。

出発の日、十月三十一日、「別れなればの涙にわが恋しの君訪れ玉ひぬ。」無論後の妻節子である。しかし啄木は別れを否定する、永遠を友とする愛に今日のみということはない、と。

「二つ並べる小笹舟運命の波にせかれて暫しは分るゝとも又の逢ふ瀬は深き深き愛の淵の上に波なき安けさぞ尊からむ。東都の春の樂の音に共に目さめむもこゝ六ヶ月のうち。」

と六ヶ月と限ってそれまでには成功し、恋人を迎えとる言っている。この成功までの日数を限るのが啄木らしい。さてプラットホームでは多数の友の見送る中に、「薄くらき掲燈の下人目をさけ語なくして柱により妹たか子の君の手をとりつゝ、車中のわれを見つめ玉ふ面影!!!」。

友細越夏村の下宿に転がり込み、翌日小日向台に部屋を決めるのだが、小日向台に上るともう都会を見渡して、「今わが腑観する大都よ。汝は果たして如何なる活動をなしつつあるか。」まさか魔ではあるまいが、「吾はこの後心とめて汝の内面を窺はんか。」と言う。この「内面」が後に「精神」となるのだ。

こうして始まる啄木の上京生活は、在京の同窓諸友との交遊と、主に杜陵に残した友達及び恋人との手紙の交換だった。中でも一級上の野村長一（葦舟、後胡堂）はずけずけと云う、「友は云ふ、君は才に走りて真率の風を欠くと。又曰く着実の修養を要すと。」また中学を卒業しなければダメだ、と。「葦舟君と共に神田辺を徒歩し諸所の中学に問ひあはせたれど何れも五年に欠員なくて入り難し。」また相当に大人びた野村は、啄木からその恋愛を聞かされたのか、恋愛なんか止めちまえ、結婚した時、不幸になるぞ、と言う。しかし、恋愛に夢中の啄木は、分け知りの野村に同じない。結婚は、心を結んだ男女が、その上で身体を結ぶもの、人生の連合艦隊だ、と反発する。ロマンチックである。この頃の啄木は節子との愛の交換時代で、「汝の慰謝者は何ぞ」と問われたら、自分は直ちに答えて「右に白百合の白花（注・節子のこと）を左に郷なるユニオンの友らを」指し示さんと言っている。

啄木はいつも恋人と大勢の友達に囲まれている。この点が賢治と違う。賢治には一、二の友人と妹と父と母とがいるだけだ。その上で時代の思想というものを考えていたのいかにも啄木らしい。「オ、繁華なる都府よ、人の多くはこの実相の活動に眩惑せられて成心なき一ヶの形骸となり了る。吾はこの憐むべき幾多の友を見たり。」大都會の外

観に惑わされてはいけない、それだけを追っていると、都会に屍を曝す事になるぞ、と自分をいましめる、

「然れども吾人の見る所を以てすれば都府には一の重大なる精神あり。その嚮ふ所は本源の活動にありてよく諸地方の活動に根本の制裁を与ふ。彼が物質上に思想上に常に偉大なる勢力をたちて全国に命令する体度に至つてよく吾人の渴仰に値することあるべし。都府に於ける人の成功と否とは実にかゝる者と自己の胸中の成心との交渉の如何に存す、」

東京には一つの重大な精神がある、そいつは全国に向かつてリーダーシップを取るところから見て、時代思潮のようなものと思われるが、啄木はそれを掴みたい、人が成功するかどうかはそれと自分の野心とがどうかかわり合うか、にあるという。

啄木の青春と東京というテーマは、或いは啄木生涯の課題と言い換えてもいいかと思うが、この時代思潮を掴もうと彼が悪戦苦闘した跡そのものが答えるであろう。

この最初の上京に於いては、それが何だとは無論分らない。

十一月九日、初めて待ちに待った新詩社の会に出た。初見の詩人たちを好意的ながら批評しているのが啄木らしい。「都は國中活動力の中心なる故万事活発々地の趣あり。かの文芸の士の、一室に閑居して筆を弄し閑隠三昧に独り楽しめる時代はすでに去りて、如何なる者も社会の一員として大なる奮闘を経ざるべからずなれり。」と詩人のイメージが変わった、一人部屋に閉じ込もって書く詩人から、共同で社会に活躍する時代になった、と痛感する。問題は翌日である。啄木は独り

新詩社を訪う。待つ事少し、莞爾として入り来たり談湧くが如き鉄幹に、不遇と聞いたが、この人が世に容れられぬわけがない、と思う。

「氏曰く、文芸の士はその文や詩をうりて食するはいさぎよき事に非ず、由来詩は理想界の事也直ちに現実界の材料たるべからずと。

又云ふ、和歌も一詩形には相異なけれども今後の詩人はよろしく新体詩上の新開拓をなさざるべからずと。又云ふ、人は大なるた、かひに逢ひて百方面の煩雜なる事条に通じ雄々しく勝ち雄々しく敗けて後初めて値ある詩人たるべし、と。」

その他、君の歌は奔放にすぎるとかいろんなことを言った。その中でこれまで研究者の注目した点は、上の二番目にある、これからは歌よりも詩をやれと言った点だ。啄木は歌でやろうと思っていたらしいから、なるほどそうかと忠告に従う氣になったろう。しかし衝撃を受けたのは、第一と第三だった。いわば鉄幹は奔放な啄木に釘を刺したのだ、文芸で食おうとしてはいけないよ、こいつと食うことはまるっきり別なんだ、と。啄木は、それが啄木のいいところだが、こいつで食うつもりでいたのである。人生の戦いに敗けてこそ真の詩人になれる、というの。啄木は勝つつもりでいたから。この二つは大きなダメージを与えた。啄木の近い将来を予言していたから。

いや、予言というより今少し深い意味がある。啄木が東都の文壇を制圧すべく、勇躍上京すると、必ず彼の意図を全否定する批評に出会う。すると聡明な彼は、自己の野心よりも批評が正当であると認め、力を振り絞って自己を変えて行く。第一回目の上京の時も、第二回目の時も。それが啄木に於ける東京と青春との構図だった。

つまり時代の主潮を探し出し、それとかわろうと考えた啄木の前に、この時は鉄幹の言葉が立ちふさがった。文学では食えないよ、歌よりもこれからは詩だ、戦いに破れてこそ偉い詩人になれる、と。

実際には、中西屋や丸善で洋書を買ったり、図書館に通ったり、イブセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」の翻訳を試みたりしたが、たちまちに窮乏し、下宿を追い出され、同境遇の少年と二人、ある人の好意で部屋に置いてもらったが、病氣をし、結局翌年二月に故郷の父に連れ戻されるはめになった。みじめな惨敗であった。

詩集刊行が目的といわれた第二回の上京は、ちょうど二年後の明治三十七年十月二十八日。その一月前の九月二十八日から小樽の姉の許へ旅行した。日露戦争たけなわなのに、青森函館間、函館小樽間の海路を手紙では少しも心配していない。なおこの年二月に節子と婚約した。以前から肉体関係があったようで、日記では「妻」と呼んでいる。

上京した啄木は、向ヶ丘弥生町、駿河台袋町、牛込砂土原町と転々と居を移しながら詩を作り、「この頃は方々に反響ありて詩運益々愉快に有之候」（十二月十一日、上野さめ子宛）と得意だが、今回も二つのダメージを受けた。一つは、十二月九日読売新聞の時評（評者正宗白鳥）を読んでショックを受け、十四日姉崎嘲風に訴えている、

「師よ、師は去る九日の読売新聞にて、『白百合』を評したるうちにいたくも我が詩を非難したる時評氏の一文を見玉ひしや。そは我が詩を非難したるものに非ずして今の詩を非難したるものなりき。」

正当にも啄木は、これは自分個人の詩への非難ではなく、現代の詩一

般への非難なんだと認めながら、

「さて思へらく、この批評はもとより我が詩を知る者の言に非ず、然れどもこれ時代の詩に対する一部の要求を確かに伝へたるものなり、と。」

さらに正當にもここには詩に対する時代の要求がある、と認めた。そして評者に会いに行ったが、白鳥はボクは詩を知らない、あれはやむを得ず書いたんだ、と逃げてしまったので、啄木はじだんだを踏んでくやしがつている、

「師よ、刃向ふものに逢ふ毎に我は層一層の勇氣を感ず。」

と。闘志が起こつたと言う。白鳥にはではない。自分に向かつてである。白鳥のそれはこういう文だった。

「試みに石川啄木の天火蓋を読むに、吾人何等の美をも感ずる能はず。用語とても甚だ厭ふべきを見る。『恋ハ天照る日輪のみづから焼けし蠟涙や、こぼれて、地に盲ひし子が冷に閉ぢける胸の戸の夢の隙より入りしもの』の如き、あまりひねくり廻した比喩にて、お説の通りと感服も仕兼ねるなり。詩ハ必ずしも一読して直に感ずべき者のみならず、難句に満つとも又可なるべきも、この詩句のやうにてハ、考ふれば考ふる程、馬鹿らしくなる也。意味に於て取るに足らず、調に於て一層取るに足らず、語に於てハ更に一層取るに足らざる也。『破壊』といひ『沈黙』といひ所謂苦心慘憺の語かハ知らねど、如何に不完全なる日本語とても他に幾多平易にして且つ詩的な妥當の語あるべし。」

これは実に明快、辛辣に啄木の陥っている詩に対する考へのせまき、

興味の低さをついたものではないか。時評子は、さらに翌々日にも、

「世ハさまざまなれば、今日の新体詩をも珍重する人のあるかも知れねど、吾人ハこれ程面白味の少なき者ハ、他に比類なきを感ず。例の苦心慘憺も骨折損とのみ思はれ、如何に新体詩人が泣言をいふも少しも同情の念起らず」と追ひ討ちをかけている。「この社会の人々ハ全く頭腦の異なるを思ひ、一層新体詩の厭はしくなりぬ」とも言っている。子規の「歌よみに与ふる書」を思わせる因習打破の鉄槌である。

この大部分を啄木はもつとも思つたのである。「時代の要求」という啄木の言葉は、彼の中の文明批評家が、白鳥の評に應じて出したのである。真に打撃を与えたものは白鳥でなく、自分だった。詩人の中にあつて表現者を超える文明批評家であつた。ここにわたしは啄木らしさを思う。

彼は『あこがれ』出版以前に『あこがれ』を見切っていた。それは『一握の砂』を出す前すでに『一握の砂』を超えたのと相似である。

第二のダメージは、金のことである。十二月二十二日、二十五日、また一月七日、以下三月、四月の金田一京助宛手紙の語るものだ。啄木という男は、時期によって付き合う相手が変わる。従つて手紙の相手も変わる。この点、賢治が生涯、殆ど父と一、二の親友にしか手紙を遣つていないのと対照的だ。この時期は、小沢恒一、上野広一ら旧友と、上野さめ子、斎藤佐蔵、立花さだ子ら浪民の人と、『白百合』の前田林外が主な相手だったが、この頃から、金田一を主な相手にして、いわば金田一を標的にして借金、天才、汚い啄木が始まる。

「生は予算が違つて誠に哀れなる越年をせねばならぬ事と相成り候。

詩人や学者、何処も同じ秋の夕ぐれにてトント算段がつかず。斯うなつては氣樂な者、笑ふより外無之候。」(二月二十二日)

これでも察しない友に、今日は二三の友を上野に送つたら帰りたいなつた、と言ひ、「本日太陽へ送りたる稿、切におくれて新年号へ間にあはぬとの事天溪より通知あり、この稿料(?)来る一月の晦日でなくては取れず、又、あてにしたる時代思潮社より申訳状来り、これも違算、……」と言つてから、

「一月には詩集出版と、今書きつつある小説にて小百円は取れるつもり故、それにて御返済可致候に付、若し若し御都合よろしく候はば、誠に申かね候へども金十五円許り御拝借願はれまじくや」

と頼み、「世の中には金で友情を破る様な事も沢山有之候事故」申しかねるが、と相手の断りを先取りして防いでしまふ。こうして借りた金は無論返せる筈もなく、新詩社の新年会を面白おかしく報じた後、「せつ子御伺ひ申せしや否や。」葉書は出した筈だから「洋弦に熱中して兄をお伺ひもせぬとならば、これは叱るべき事也」とおもねったり、督促に、「あ、我は大罪人となりぬ。我は今この風寒き都を奔走しつつあり」と訴え、四月十一日によやく「故郷の事情」と言う。それは無論十二月に父が宗費滞納のとがで住職を罷免されるという事件が起こつた事を指す。岩城之徳が、啄木はこの頃ようやくそれを知つた、と言うのは、受け取れぬ。十二月の段階で知つたからこそ、事実寺から金が来ぬからこそ、借金が始まつたのではないか。

「兄よ、天下に小生の恐るべき敵は唯一つ有之候。そは実に生活の条件そのものに候」と訴えている。金の事である。

詩集『あこがれ』はなんとか出版にこぎつけたが、五月十一日上野広一にはせつ子を東京へ呼ぶ、家も見つけた、と言ひ、十日後小沢には青葉城下に來た、と言ひ、翌日金田一に故里の閑古鳥聴かむと、しかし月末再び都門に、と言ひ、五月三十日上野に好摩より、二三日中に盛岡にゆくと言つたが、この日は盛岡で自分の結婚式の筈だつた。つまりめちやくちゃである。仙台では土井晚翠夫人から母危篤と偽つて金を借り、長逗留の宿料まで押しつけた。花婿のいない結婚式に、仲人役の上野やこれまで二人を支持してきた小沢らユニオン会は啄木を除名、絶交となつたことはよく知られていよう。啄木の行動は妻となるべき人の不幸を予測しての故だつたらうか。否、彼は自己の才能と成功を疑わず、妻の幸福を確信していたから、それはありえない。見栄を張リたかつたが、一文無しになつたためであらう。

第二回の上京は、時代の要求と生活の条件とのために、さんざんな目に逢つてついに東京退去となつた。

その後、盛岡での『小天地』発行、浪民でのいわゆる「日本一の代用教員」一年、北海道放浪一年を経て、すっかり荒廃した生活を立て直そう、それには自己の文学的運命を切り開くしかない、最後の上京をする。

「家族を函館へ置いて郁雨兄に頼んで、二三ヶ月の間、自分は独身のつもりで都門に創作的生活の基礎を築かうといふのだ。」

(明治四十一年四月九日、日記)

今度は生活の基礎を築く、つまり一応の成功まで、僅か「二三ヶ月」

と言って友を騙した。しかし自分ではこういう、

「老母と妻と子と函館に残った！ 友の厚き情は謝するに辞もない。自分が新たに築くべき創作的生活には希望がある。否、これ以外に自分の前途何事も無い！そして唯涙が下る。唯々涙が下る。噫、所詮自分、石川啄木は、如何に此世に処すべきかを知らぬのだ。」

犬コロの如く丸くなって三等室に寝た！

上京後、自然主義の時代だから自然主義の小説を書こうと、五六編の中編小説を書き、売り込みに奔走したが、森鷗外を煩わしても、どれも売れず、金にならず、生活が成り立たず、相変わらず金田一の世話になっていた。そういう六月のある晩、一夜にして百数十首の短歌が出来た。翌日も。しかしこれで啄木の歌が成立したのではない。この時の歌はへなぶりⅡふざけ歌で、自分でも満足のゆくものではなかった。『明星』終刊、『スバル』時代を迎えて、同世代の文学者との交遊が多くなるが、フン、短歌などつまらない、と平野万里と対立し、蕩児の吉井勇とも、大好きな太田正雄とも、技法上影響を受けた北原白秋とも別れて、自分独りの家を作るのだと、自らを超人とすべき実験を、自分独りの方法で記録する「ローマ日記」を書き始める。いわば自己中心性、ひらたく云えば自分勝手に徹すること、共同性を、文学の共同性も、社会の共同性も越えようとしたのである。

しかし無限の自己拡張と言っても、給料を——啄木は自分の編集した『スバル』を持って同郷の佐藤真一編集長に頼み込み、明治四十二年二月から朝日新聞社の校正係りに雇われていた。——前借しては、浅草塔下苑に女を買いに行く生活でしかなかったが。

明治四十二年六月家族上京、それでも止めない啄木の生活は、妻の家出などによって破綻し、暗闇に横たわって目の慣れるのを待つような状態の間に、詩というものを再び考えるようになったという。それは日常の食事の香の物のように必要な詩、「現在の日本に生活し、現在の日本語を用ひ、現在の日本を了解してゐるところの日本人に依て歌はれた詩」（『弓町より』）だという。これは少しきつい言い方で、やさしく言えば、平易な日本語で、柔軟なリズムの、何より自由な内容の——ということとは因習にとられない、批評性を持った——詩であろう。その上、啄木はこれまでは自分をえらい者として書いてきたが、少しもえらくない、平凡な者としての自分がその中に居る詩である。いわば二度目の上京の時感じた「時代の要求」を、ようやく生かすことが出来た。三行書きの歌集『一握の砂』の誕生である。

しかしこれにも満足がゆかぬ。この歌集と前後して大逆事件が起こる。事件をひきおこした強権の主張する国体——日本の国家形態、いわば国家と国民との関係の特殊性の強調。つまり天皇制絶対主義の主張——に対して、歴史の尊重を将来に向かってまで維持しようとするならば、「日本が嘗て議會を開いた事から先づ国体に抵触する訳になりはしないだらうか。」（『歌のいろいろ』）今の政府のやり方は明治以来の近代化の歩みの全否定ではないか、と批判する。そして理想を失い、方向を失った「時代閉塞の現状」に必要なものはただ一つ、「明日の考察」だという。

このことで啄木は、後に天皇制と対峙したプロレタリア革命運動の予言者・先駆者の位置を与えられるが、そのことで啄木はやや形式的

で偏狭な社会主義者として描かれることが多く、今日ではかえって世に容れられ難くなってしまった。

しかし「明日の考察」は「明日の考察」である、つまり未来の構想であって、明治四十三年の「明日の考察」が今日そのまま通用する筈もない。今日には今日の「明日の考察」であろう。それに啄木としては、青春と東京の出会いに発した「都府には一の重大なる精神あり」の「精神」を見失ったという思いが、「明日の考察」と言わせているのだから、彼は一貫して変わっていないともいえる。

言い換えるところである、都府には一つの精神あり、の精神を探し出して批判して行かなければにっちもさっちも進まない。それはみんなの為のようでもあるが、ひっきょうは自己の要求である。それは究極には一人の道であることで、賢治に近づく。

そのことを証すために、「歌のいろいろ」「時代閉塞の現状」と同じ頃に書かれた「田園の思慕」を読む。

田園から都会への移住者は、その第一日目から田園を思慕する。しかし都会から足を抜けないのが都会というものの魔力だ。移住者は、思慕を深めたまま死ぬ。その子の世代（二代目）になると、田園は、直接見たのではないが、父母から聞いた風景として、おとぎ話の幸いの島のように、生活に困憊した心を引く。死ぬ。三代目になると、気持ちはかなり遠ざかり、田園の思慕も良心も失い、やがては思慕すべき一切を失う。「官能の鋭敏と徳性の麻痺とは都会生活の二大要素である」から。

近代の文明では、都会と田園との溝渠が深くなる。田園にいる人の

都会思慕が日一日と深くなり、都会に住む者の田園思慕も日一日と深くなる、と言ってから啄木は、笑われてもかまわない、自分は思慕を深くしたい、何故なら「安樂を要求するのは人間の権利である」と言う。一見、一切を失うアナキズムへ向かって猪突猛進するようだが、そうではなくて、故郷を思慕した『一握の砂』の気持ちへ戻りたい、そこに日本人の魂の安らぎがある、自己中心性に徹することでも一度「ローマ字日記」に戻ろう、そこに日本人の戦いがある、と言うのであろう、人間を取り戻すために。そこが賢治に近いと思う。

二 賢治の東京は趣味的喜びに始まる

1 大正五年（一九一六）八月——九月、ドイツ語講習。秩父地方土性調査旅行に参加。

2 大正七年（一九一八）十二月——八年三月、トシ入院のため看病、しかし自立の計画。

3 大正十年（一九二二）一月——八月、家出して東京で国柱会への奉仕、筆耕、童話制作。

4 大正十五年（一九二六）農学校教師を辞めた年の十二月、上京して図書館、新交響楽協会へ通い、オルガン・セロ、エスペラント、タイプライター等を習う。

5 昭和六年（一九三一）九月、化粧壁見本を持って上京、発熱し、倒れる。

賢治の主なる東京行きは上の五つである。このほか大正六年の一月には商用で上京して芝居を見ているし、大正十二年の一月には、弟に

童話の売り込みをさせ、国柱会の芝居を見、国柱会本部にトシの骨を納める準備をした。昭和三年六月には伊豆大島へ行く途中、東京で浮世絵展を見、芝居を見ている。芝居が多い。

賢治の東京は、故郷の夢を東京に運び、東京の人々にもたらし、東京の夢を故郷に運んで故郷の人々にもたらし、事との二つで、それをしに彼は往還した。あるいはそれらが還流した。

賢治は大正五年三月、修学旅行で東京、京都、奈良の農事試験場を見学、帰りはグループ別の行動で伊勢、渥美、箱根などで暴れて青春を満喫して帰り、八月、上京してドイツ語講習を受ける。この時高橋秀松と同居し、保阪嘉内にしきりに手紙を遣っている。そして八月末には学校（盛岡高等農林）の関教授指導の秩父地方の土性地質調査見学に上野から参加し、それを保坂に短歌で報告しているのだ。その前に東京の歌を見ておこう。

青銅の穹^{ゆみ}屋根は今日いと低き雲をうれひてうちもだすかな
おとなしく白びかりせる屋根ありてすこしほころしく坂を下りぬ
はるかなる淀みの中のある屋根は蛋白光をあらはしにけり
日本橋この雲のいろ雲のいろ家々の上にかゝるさびしさ

密林のひまより碧きそらや見し明きこゝろのトルコ玉かな
歌まろの乗合船の絵の前になんだあふれぬ富士くらければ
ほそぼそと波なす線はうすれ日の富士のさびしさうたひあるかな
ひろ重の木曾路のやまの雪のそら水の色水の色人はとられん
ニコライ堂だろうか、屋根への愛情。空や雲や家々の屋根や石への愛情。そして版画の線や色への愛情。実に不思議だ。吉本隆明は賢治の

本草への過剰の愛と言ったが、建物や空や雲や、版画の線や色への過剰な愛は。さて旅行の歌は、

はるばるとこれは秩父の寄居町そら曇れるに毛虫を燃す火
はるばると秩父の空のしろぐもり河を越ゆれば円石の磧^{なま}
つくづく「粋^{いき}なもやうの博多帯」荒川ぎしの片岩のいろ
山かひの町の土蔵のうすうすと夕もやに暮れわれら歌へり
霧はれぬ分れてのれる三台のガタ馬車の屋根はひかり行くかな
空や石、岩への愛は相変わらずだが、岩を「粋なもやうの博多帯」と
浮世絵版画風に描いている。これを学問とすれば、学問も趣味なのだ。
趣味の世界にどっぷり浸かっている。だがともかく三台のガタ馬車に
乗った一団の中にある彼の気持ちは、まさに青春そのものであったら
う。

荒川の碧^{あを}きはいとどほこらしくかすみたる目にうつりたるかな
あはあはとかびいでたる朝の雲われらが馬車の行手の山に
友だちはあけはなたれし薄明の空と山とにまだねむれり
星月夜なほいなづまはひらめきぬ三みねやまになけるこほろぎ

定本全集年譜によると、「九月二日（土）関豊太郎教授神野幾馬助教授
統導による秩父、長瀨、三峰地方、土性・地質調査見学は例年農学科
二部、林科学生を引率して行われる。上野駅に集合して出発するので、
在京中の賢治は帝室博物館を見たあと停車場へ行き」合流して、この
日熊谷泊り、以下寄居町、小鹿野町に泊り、五日（火）三峰山に登り
三峰神社に宿泊、翌日下山、帰校したらしい。

賢治の「初期短編綴等」に「電車」がある。賢治らしい、むしろく

しゃした若い古物商と、大きなめがね、制服制帽の大学生が、眼で軽蔑し合い、舌戦する。戦いにはドイツ語も交える。無論心の中での戦いで、「彼は大学生という階級に一種の羨望の念の交った『むしろくしゃ』した反感と、『ひよっこ』どもに何でまけるものかという気持ちとを抱いていたのではないか」(恩田逸夫)と言われるが、ドイツ語を習っていたこの時のものだろうか。短歌からは、賢治の内心はもつと伸びやかであらうと思われるが、この時かもしれない。

とにかく最初の上京の賢治の心を領していたものは趣味である。ドイツ語も、浮世絵も、土地地質学という科学さえもそうだったと思われる。彼は啄木と違って、金の心配は全くしない人間だった。

二度目の大正七年末から八年三月までの上京。これこそ賢治が東京にかけた青春の夢の時間だった。入院したトシの看病の為とはいっても、医者に言われた通りを、看護婦(付き添い婦)に命じて病人の食事を作らせ、父に妹の病状を報告するだけで、あとは図書館へ行った、小林さん(父の東京での商売上の友人)に相談して、どうしたら自立して東京で暮らして行けるかを考える。指輪用の飾石の研磨販売、模造真珠やカフスボタンの製造、鍍金^{メッキ}など飾り職人のようなことをしてやがて人造宝石にとりかかる。そんなことを父に訴える毎日だった。たとえば、

「終りに一事御願申し上げ候。それは何卒私をこの儘当地に於て職業に従事する様御許可願ひ度事に御座候。色々鉱物合成の事を調べ候処殆ど工場と云ふものなく実験室といふ大さにて仕事には充分な

る事、設備は電気炉一箇位のものにて別段の資本を要せぬこと、東京には場所は元より場末にても間口一間半位の宝石の小店沢山にありていづれにせよ商売の立たぬ事はなきこと、この度帰宅すればとても億劫になり考へてばかり居て仕事の出来ぬ事、いつまで考へても同じなる事、この仕事を始めるには只今が最好期なる事(経済の順況、外国品の競争少き為)、宅へ歸りて只店番をしてゐるのは余りになさけなきこと、……」(八年一月二十七日、父宛)

などと云う。あくまでも「私の目的とする仕事は宝石の人造に御座候。」だ。資本も二百円か三百円、五百円あれば電気動力も用いられるが、先ず二百円でやってみたい、

「依て最初は随分見すばらしき室にて只一人にて石を切ったり磨いたり労れたるときは鍍金をしたり、石を焼いたり煮たり(但しこの前二階にてやり候様の悪瓦斯等の心配は無之)、夜は勉強をしたり休んだり致すべく候。」(二月二日、父宛)

これは彼の童話の主人公のような生活ではないか。たとえば小屋のある場所は違うが、セロ弾きのゴーシュ。ということは童話が彼の理想の生活の表現であるとともに、彼自身が童話のような生き方に憧れていたのである。このことや、資本金を次第につり上げながら、自分で失敗を予想し、石はさっぱり売れず、資本は失い、全く失敗したとてしかたない、ひとつ失敗するつもりでやらしてほしい、などと言いつつので、とうぜん父は反対に傾く。

ただその初めの方で、上京してすぐに、小川町の宝石店にあたりをつけ、岩谷堂産蛋白石、繫温泉の瑪瑙などを印材用に売り込もうと考

え、父に送ってくれと言ったのが注目される。

賢治が妹の看病をしながら、自立して都会で暮らす事を考えた時、化学的に人造宝石を作る事と共に、故郷の石を磨いて宝石や美しい印材とし、東京の人に美しい夢を与えることを夢想した。大正七年から八年にかけてのことで、父の反対にあつて潰れた。

そこで、今度はそれを言葉でしようとしたのが、二年後大正十年の家出の後半の童話創作だった。故郷の岩手の自然の光や風の物語を東京で売ろうとした。いや東京の人々にただであげようとしたのだ。それは「トシ病氣」という電報で、病氣に嘘はないが、半分は父親の策略で、仕事なかばに呼び戻される。

これが上の表で三回目の上京で、普通はこの時の上京は、父との宗教的対立から家出して「本郷菊坂町七五稲垣方に間借、赤門前の文信社で筆耕、午後は街頭布教や国柱会本部での奉仕活動など。高知尾の焚めにより猛然と童話を多作。」(天沢退二郎)等と言われて、天才の証拠とされているが、冗談ではない。一どきに三人前の仕事が出来るわけがない。おまけに蒲柳の質で菜食主義者なのだから。筆耕といつてもガリ版切りで講義ノートを作成する、「朝八時から五時迄座りつ切りの労働」(大正十年一月三十日、関徳弥宛書簡)で月十二円、これですべて奉仕活動だの、ましてや童話の創作だの出来るであらうか。それも三千枚もの。こんな自活はすぐにやめて、家出中におかしな事だが四月に父と関西旅行して以来、家から金を貰ったのであらう、七月に関に云う、

「私は書いたものを売らうと折角してゐます。それは不真面目だとか真面目だとか云つて下さるな。愉快な愉快な人生です。……うちから金も大分貰ひましたよ。左様十五円に二十円に今月二十円来月二十円それからすりに十円とられましたよ。」

図書館へ行つて見ると毎日百人位の人が「小説の作り方」或は「創作への道」といふやうな本を借りようとしてゐます。なるほど書く丈けなら小説ぐらゐ雑作ないものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎氏のやうに七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴じたりしてゐるとお思ひですか。どんな顔もして居りません。」

これは、あの岩手の「林や野原や鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきた」話、「風に吹きとばされて来た」話を東京の人に伝えようとしたのだらう。弟を雑誌社に原稿売り込みに遣つたように、賢治は直接東京人に話す事は苦手だったらしい。だから書いた。童話集『注文の多い料理店』の広告でも言っている、

「これは田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光との中からつや、かな果実や、青い蔬菜と一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである。」

と。柳田国男は『遠野物語』の序で、遠野より物深い所には無数の伝説があらう、「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。」と言つたが、賢治はもつと優しく、楽しく美しく新鮮なものをどうぞ、と都会人に勧めたのであらう。

そして逆の場合もあつた。吉田司『宮沢賢治殺人事件』^(註)によると、

父が四国丸亀あたりで古着を仕入れては花巻で売り、商売としたように、賢治もそういう商人根性が抜けきれず、東京でものを仕入れては、故郷で売ろうとしたという。この言い方は少々えげつないが、東京からさまざまな文化を仕入れては、その恵みを故郷の人々にもたらそうとしたのは事実であろう。それがドイツ語だったり、浮世絵だったりしたが、特にエスペラントやタイプライターや音楽や芝居の勉強を集中的に仕入れようとしたことがある。上記の四回目、羅須地人協会発足の大正十五年十二月のことで、父にこう言っている、

「もうこれで詩作は、著作は、全部わたくしの手のものです。どうか遊び仕事だと思わないでください。遊び仕事に終るかどうかはこれからの正しい動機の固執と、あらゆる欲情の転向と、倦まない努力とが伴ふかどうかによって決まります。生意気だと思はないでどうかこの向いた方へ向かせて進ませてください。実にこの十日はそちらで一ヶ年の努力に相当した効果を与えました。エスペラントとタイプライターとオルガンと図書館と言語の記録と築地小劇場も二度見ましたし歌舞伎座の立ち見もしました。これらから得た材料を私は決して無効にはいたしません、」(十二月十二日、父宛)

それは農民劇団旗揚げのために必要だった。羅須地人協会とはこれだった。決して今日理解されているような、農民のための肥料相談所などではなかった。それは最初の目的が潰れて、泣く泣くそうなったのである。当時は左翼のプロレタリア運動と演劇との結びつき、つまり民衆をアジるものとしての芝居が国家警察の注目するところだったから、賢治の劇団も特高に睨まれて、呱呱の声をあげることが出来なかつた。

だからここで東京の楽しさを岩手の、特に花巻の人々にわけてあげる、むろん無料で、という賢治の夢は潰れた。その余韻と見られるのが昭和三年六月、大島ゆき前後の芝居見物だったが、それはあくまでも名残だろう。羅須地人協会を大島に移す案も賢治の病気でおじやんになると、初心に戻って、岩手産の美しい石の壁を東京の人々にもたらす案が浮上する。東北砕石工場の仕事の一端だが、重い化粧壁の見本を持って上京し倒れた、第五回、最後の上京はそれである。

賢治にとつての青春の東京とは、啄木のようにそこでしか文学の仕事は出来ないという、唯一の目標ではなかった。岩手から東京の人々へ美しい新鮮な自然をもたらし、東京から岩手の人々へ香り高い文化(中には浮世絵の枕絵やエロ写真といったすえた香りもあるが)を運ぶ、そういう往還運動、自然と文化の大巡環の一方の極であった。

また賢治は啄木と違って、金を取ってそれで食わねばならぬ必要に殆どいっぺんも迫られなかった。それが賢治の強みで弱みだろう。だから啄木のように時代の主潮を掴もうと勉める必要もなく、その主潮を批判して、その逆を構想する必要もなかった。賢治も無論時代の好みは感じとっていたが、それを踏まえた上で、超越した。仏教と科学がそれを可能にしたと思う。

吉田司は、啄木の「時代閉塞の現状」にいう、村々に増えつつある、父兄の財産を食い減らす事と無駄話をする事だけが仕事の「遊民」こそ賢治の本質で、それと花巻商人のエネルギーが結びついた花巻モダンが、彼のものだと言う。こうして吉田は啄木の側に立って賢治を断罪してみせたが、しかしいつの世にも啄木と言えさえすれば相手は恐

れ入る、啄木万能とは行くまい。現代では日本人の殆ど全部が遊民志望であると言つてもいい状況であつて、皆が啄木よりも賢治に惹かれてゐるのも事実である。

啄木は田園と言ひ故郷と言つて、岩手とは言わない。岩手だけ済民だけの事ではないと、一般化して考える。明治の日本の都会と田園のこととしている。賢治は「これは田園の新鮮な産物である」と言い、「糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まらない反感です」(『注文の多い料理店』の広告)と言うが、その田園や村は、「ドリームランドとしての日本岩手県」であつた。岩手に限られていた。東京と岩手の落差に愕然とするが、美しいものや楽しいものを持つて往還するのだ。サンタクロースのように。その自己中心性は啄木よりも強く、天性のものと言つていい。それこそが大正文化の一面でもあつたらうか。

(注) 吉田司『宮沢賢治殺人事件』(一九九七年三月、太田出版)

(本稿は細川研一氏の示唆による。また拙著『石川啄木』(一九八一年五月、勁草書房刊)と拙著『宮沢賢治の手紙』(一九九五年七月、大修館書店刊)に負うところが多いことを記す。)